

中越地震の被害と復旧

## 国道291号 本格復旧の概要

国道291号は、地震発生直後、土砂崩落等により被害を受け、道路の原形をとどめていない箇所も多く見られた。旧山古志村東竹沢～小千谷市小栗山区間の約10kmは、特に被害が基大であった。復旧工事着手から25日目の平成16年12月5日、復旧工食用道路が完成。平成17年3月28日、工食用道路の除雪を開始し、4月から本格的な工事に着手した。道路復旧は、アメリカで実践されている「シーニックバイウェイ」を参考に、沿道の景観や自然環境への配慮、交流促進を考慮し行っている。

### ■一般国道291号の災害復旧区間の復旧計画



被災状況(旧山古志村東竹沢)



復旧工事の状況

山古志にまつわる数字



人口

2,168人  
(平成16年12月27日現在)

世帯数

681世帯  
(平成16年12月27日現在)

65才以上の  
お年寄りの割合

34.6%  
(平成16年12月27日現在)

集落数

14  
大別して5集落

位置

新潟県のほぼ  
中央に位置

- ・東経 138度53分  
北緯 37度19分
- ・中心部から上越新  
幹線長岡駅まで  
20km
- ・関越自動車道小千  
谷ICまで14km

標高

最高 710m  
最低 120m  
150～450m程度の  
地溝状窪地に点在

総面積

40.14km<sup>2</sup>  
(平成16年12月27日現在)

広がり

東西 8km  
南北 9km

川

数本の中小河川が東  
西南北に分かれ、集  
落を縫って信濃川に  
流れている

気候

全国でも有数な豪雪  
地。日本海の湿気を  
多く含んだじつとり  
と重い雪に覆われる



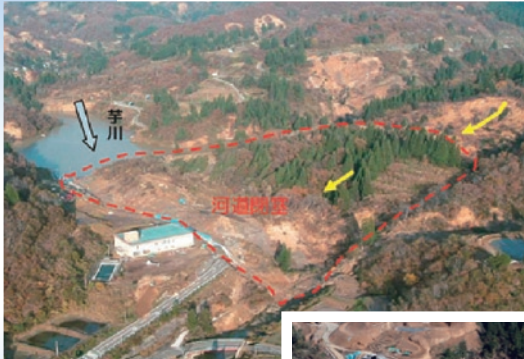
Yamakoshi

山古志

中越地震の被害と復旧

## 芋川流域 河道閉塞対策の概要

地震により、芋川流域内では崩壊842カ所、地すべり124カ所、河道閉塞が52カ所発生。「寺野地区」「東竹沢地区」の河道閉塞については、平成16年12月28日までに仮水路などの応急対策を終了した。しかし、いまなお、大量の不安定な土砂が河道内に堆積し



東竹沢地区 河道閉塞状況 (H16.11.7)

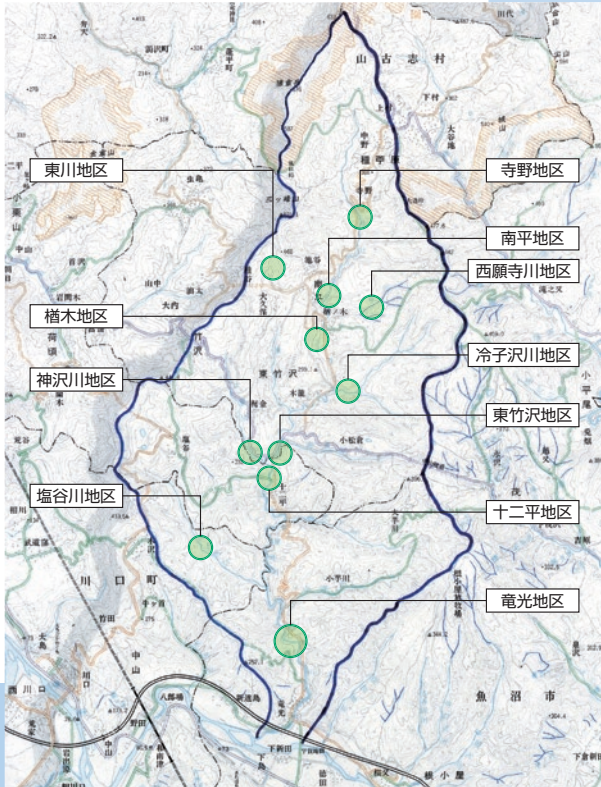


東竹沢地区 砂防堰堤2基の施工状況 (H17.11.2)

### 《芋川流域の概要》

- 位置：信濃川水系魚野川の右支川
- 流域面積：38.4km<sup>2</sup>
- 流路延長：17.2km
- 市町村：長岡市(山古志地区)、魚沼市、小千谷市、川口町

### ■芋川流域の直轄砂防工事箇所

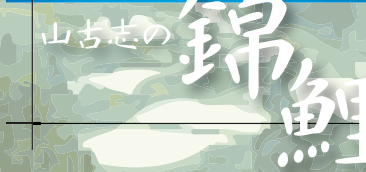
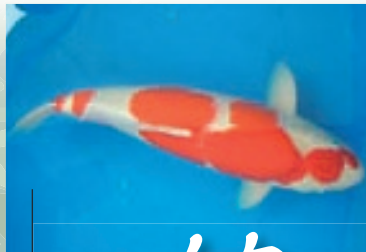


出典：湯沢砂防事務所「平成16年新潟県中越地震による土砂災害と対応」  
北陸地方整備局「新潟県中越地震—北陸地方整備局のこの一年—」などをもとに作成



およそ1千年前に始まったとされる山古志の闘牛は、起源は明らかでないが、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」(1814～1842年)によって全国に紹介されているように、かなり古い歴史をもっている。明治期に文明開化路線上で野蛮であるとの理由や勢子の服装の派手さで、一時中断を余儀なくされたが、昭和53年には国の重要無形民族文化財に指定され今日に至っている。

闘牛の日の早朝、村人は神前に御神酒を供える。山古志の闘牛は、神事として行われてきた。沖縄や宇和島等の闘牛とは異なり、古式をそのまま伝承しているものである。村内に3箇所の闘牛場があり、5月以降、11月まで会場を変えて、月に1～2回ずつ開催される。



山古志の錦鯉は、すでに江戸期末に“紅白”、“類赤”、“頭巾被り”などが作出されていたと伝えられている。明治期には、“黄写”、“浅黄”などの新種が作出され、東京、富山、関西方面に出荷され、今日の錦鯉産地の基盤を築いていった。200年余り昔から棚田にコイを放し、養殖を続けていた。

山古志のあちらこちらに見られる横井戸、その貴重な水は神秘の水色に変わり、色鮮やかな錦鯉を育ててきた。明治の初期には事業の投機的性格を嫌った県当局から養鯉業禁止令が発令されたが、大隈重信に献上して知名度をあげ、大正期には博覧会で賞を獲得するなど順調に発展し、1940年には稲作生産高の4分の1を占めるほどとなった。錦鯉発祥の地にふさわしく、国内はもちろん海外でも高い評価を得ている。

山古志の米作りの歴史は神話の時代にまでさかのぼるといわれている。棚田の前に立つと悠久の時の流れを感じる事ができる。長い年月をかけて人々がつくり上げてきた美しい棚田は、数少ない日本の原風景を今に伝える。

棚田は米を作るということの他に様々な機能を持っている。水が急激に流れて山を荒らさないように田んぼに蓄えたり、水路を作ってゆるやかに廻したり、治水や国土の保全の面にも大きく役割を担っている。

山古志の

棚田





# 旧山古志村の被害と復旧

## ■羽黒トンネル付近の大規模土砂崩落

羽黒山トンネルの西側坑口付近で発生した大規模斜面崩落(目視180万m<sup>3</sup>)は村の幹線道路である県道を埋め、周辺家屋を押し流した。復旧工事は崩落土の撤去、水抜きボーリングを施工し斜面の安定を図る工法で実施。県では18年秋には村内全集落の連絡が可能になるよう県道復旧工事を進めている。



被災状況 (H16.10.27)



復旧状況 (H17.10.9)

## 山古志の歴史

山古志は、江戸時代の初め、「山二十村」と「山六ヶ村」と呼ばれていた。のち幕領となり、山古志全体を「二十村」と呼ぶようになった。「山二十村」とは、木沢、塩谷、蘭木、荷頃、梶金、小松倉、菖蒲、岩間木、朝日、寺沢、中山、首沢、小栗山、油夫、大内、竹沢入、間内平、桂谷、大久保、濁沢の20村である。また「山六ヶ村」は、種芋原、中野、蓬平、池谷、竹之内河内、虫亀を指していた。

この「山二十村」と「山六ヶ村」を「山古志」の名で呼ぶことが定着するようになったのは1830年代以降であり、1824年(文政7)2月の役入人事の記録に、初めて「山古志村々」という名称が使われている。

古くは天領として桑名藩下にあった古志郡、明治22年町村制が施行されるが、「種芋原」「虫亀」「竹沢」「東竹沢」は独立した村として残る。

昭和の大合併では「種芋原村」「大田村」「竹沢村」「東竹沢村」が一つになり昭和31年3月に新しい村が誕生した。古志郡の山間にあり、山古志郷の通称から「山古志村」となった。

## ■芋川河道閉塞により水没した木籠集落

東竹沢地区で発生した河道閉塞による木籠集落の方々は、家屋の浸水で甚大な被害を被った。浸水被害軽減のため地すべりの監視を続けながら、緊急排水路の設置、仮排水路の整備等を24時間体制で施工した。湛水位は元河床EL130mに対して、最高水位は11月17日に157.76mまで上昇した。木籠集落24世帯65人、家屋全壊率100%。



被災状況 (H16.12.2)



水没被災状況 (H17.11.19)

## ■芋川河道閉塞(東竹沢地区)

芋川の河道は、左岸からの地すべりによって320mにわたって土砂で埋まった。河道閉塞部上流の水位があがり上流の集落では、家屋の浸水・水没するなど深刻な被害が発生した。



被災状況 (H16.11.4)



復旧状況 (H17.11.19)



※被災状況の写真：北陸地方整備局提供



中越地震の被害と復旧

## 国道291号 本格復旧の概要

国道291号は、地震発生直後、土砂崩落等により被害を受け、道路の原形をとどめていない箇所も多く見られた。旧山古志村東竹沢～小千谷市小栗山区間の約10kmは、特に被害が基大であった。復旧工事着手から25日目の平成16年12月5日、復旧工食用道路が完成。平成17年3月28日、工食用道路の除雪を開始し、4月から本格的な工事に着手した。道路復旧は、アメリカで実践されている「シーニックバイウェイ」を参考に、沿道の景観や自然環境への配慮、交流促進を考慮し行っている。

### ■一般国道291号の災害復旧区間の復旧計画



出典：北陸地方整備局「新潟県中越地震―北陸地方整備局のこの一年―」をもとに作成



被災状況(旧山古志村東竹沢)



復旧工事の状況

山古志にまつわる数字



人口

2,168人

(平成16年12月27日現在)

世帯数

681世帯

(平成16年12月27日現在)

65才以上の  
お年寄りの割合

34.6%

(平成16年12月27日現在)

集落数

14

大別して5集落

位置

新潟県のほぼ  
中央に位置

- ・東経 138度53分  
北緯 37度19分
- ・中心部から上越新  
幹線長岡駅まで  
20km
- ・関越自動車道小千  
谷ICまで14km

標高

最高 710m  
最低 120m

150～450m程度の  
地溝状窪地に点在

総面積

40.14km<sup>2</sup>

(平成16年12月27日現在)

広がり

東西 8km  
南北 9km

川

数本の中小河川が東  
西南北に分かれ、集  
落を縫って信濃川に  
流れている

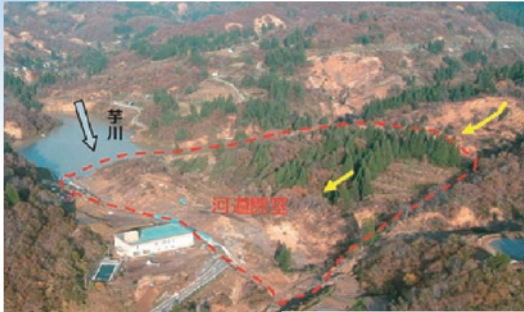
気候

全国でも有数な豪雪  
地。日本海の湿気を  
多く含んだじつとり  
と重い雪に覆われる

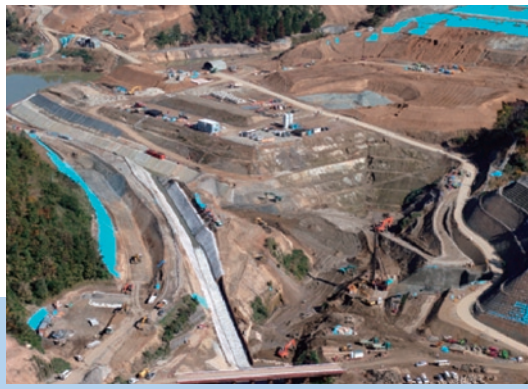
中越地震の被害と復旧

## 芋川流域 河道閉塞対策の概要

地震により、芋川流域内では崩壊842カ所、地すべり124カ所、河道閉塞が52カ所発生。「寺野地区」「東竹沢地区」の河道閉塞については、平成16年12月28日までに仮水路などの応急対策を終了した。しかし、いまなお、大量の不安定な土砂が河道内に堆積し

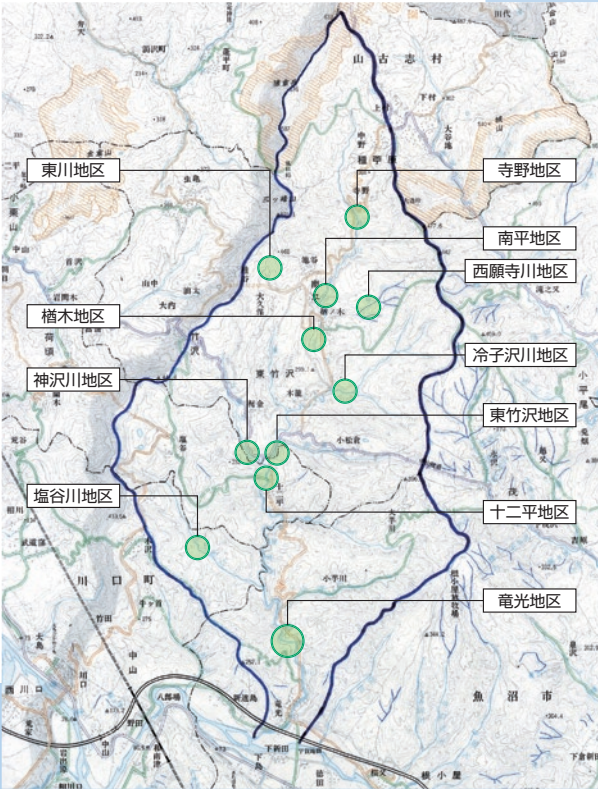


東竹沢地区 河道閉塞状況 (H16.11.7)



東竹沢地区 砂防堰堤2基の施工状況 (H17.11.2)

### ■芋川流域の直轄砂防工事箇所



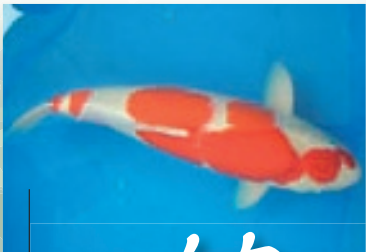
出典：湯沢砂防事務所「平成16年新潟県中越地震による土砂災害と対応」  
北陸地方整備局「新潟県中越地震―北陸地方整備局のこの一年―」などをもとに作成

## 山古志の闘牛



およそ1千年前に始まったとされる山古志の闘牛は、起源は明らかでないが、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」(1814～1842年)によって全国に紹介されているように、かなり古い歴史をもっている。明治期に文明開化路線上で野蛮であるとの理由や勢子の服装の派手さで、一時中断を余儀なくされたが、昭和53年には国の重要無形民族文化財に指定され今日に至っている。

闘牛の日の早朝、村人は神前に御神酒を供える。山古志の闘牛は、神事として行われてきた。沖縄や宇和島等の闘牛とは異なり、古式をそのまま伝承しているものである。村内に3箇所の闘牛場があり、5月以降、11月まで会場を変えて、月に1～2回ずつ開催される。



## 山古志の錦鯉

山古志の錦鯉は、すでに江戸期末に“紅白”、“類赤”、“頭巾被り”などが作出されていたと伝えられている。明治期には、“黄写”、“浅黄”などの新種が作出され、東京、富山、関西方面に出荷され、今日の錦鯉産地の基盤を築いていった。200年余り昔から棚田にコイを放し、養殖を続けていた。

山古志のあちらこちらに見られる横井戸、その貴重な水は神秘の水色に変わり、色鮮やかな錦鯉を育ててきた。明治の初期には事業の投機的性格を嫌った県当局から養鯉業禁止令が発令されたが、大隈重信に献上して知名度をあげ、大正期には博覧会で賞を獲得するなど順調に発展し、1940年には稲作生産高の4分の1を占めるほどとなった。錦鯉発祥の地にふさわしく、国内はもちろん海外でも高い評価を得ている。

山古志の米作りの歴史は神話の時代にまでさかのぼるといわれている。棚田の前に立つと悠久の時の流れを感じる事ができる。長い年月をかけて人々がつくり上げてきた美しい棚田は、数少ない日本の原風景を今に伝える。

棚田は米を作るということの他に様々な機能を持っている。水が急激に流れて山を荒らさないように田んぼに蓄えたり、水路を作ってゆるやかに廻したり、治水や国土の保全の面にも大きく役割を担っている。

## 山古志の棚田





# 旧山古志村の被害と復旧

## 山古志の歴史

山古志は、江戸時代の初め、「山二十村」と「山六ヶ村」と呼ばれていた。のち幕領となり、山古志全体を「二十村」と呼ぶようになった。「山二十村」とは、木沢、塩谷、蘭木、荷頃、梶金、小松倉、菖蒲、岩間木、朝日、寺沢、中山、首沢、小栗山、油夫、大内、竹沢入、間内平、桂谷、大久保、濁沢の20村である。また「山六ヶ村」は、種芋原、中野、蓬平、池谷、竹之内河内、虫亀を指していた。

この「山二十村」と「山六ヶ村」を「山古志」の名で呼ぶことが定着するようになったのは1830年代以降であり、1824年(文政7)2月の役入人事の記録に、初めて「山古志村々」という名称が使われている。

古くは天領として桑名藩下にあった古志郡、明治22年町村制が施行されるが、「種芋原」「虫亀」「竹沢」「東竹沢」は独立した村として残る。

昭和の大合併では「種芋原村」「大田村」「竹沢村」「東竹沢村」が一つになり昭和31年3月に新しい村が誕生した。古志郡の山間にあり、山古志郷の通称から「山古志村」となった。

### ■棚田(竹沢地区)

山古志は棚田が美しい山里。村民は集落を取り囲む山里に永い年月をかけて、地すべり地と共生しながら、棚田を造り上げてきた。今まで経験したことのない震度により、棚田の大半が崩れ落ち、用水が止まり、その被害は甚大となった。仮設住宅での生活がつづく中、7月に一部の地域で避難指示が解除され、棚田の復旧が進み出した。



被災状況 (H17.5.20)



復旧状況 (H17.11.12)

### ■一般国道291号(東竹沢地区)

地すべりの発生により斜面崩落、道路決壊の被害が著しく、直轄権限代行として災害復旧事業を実施している区間。復旧工事は山側斜面の切土、谷側の補強盛土、地すべり対策を実施、昨年末の降雪期までに道路本体部分はほぼ完了。雪解け後舗装工事、交通安全施設に着手する。



被災状況 (H16.11.1)



復旧状況 (H17.11.27)

### ■養鯉池(虫亀地区)

山古志を含む旧二十村が錦鯉の発祥地である。今や錦鯉は全国ブランドとなり、海外から多くのバイヤーも来る。錦鯉の生産額は農業生産額を抜き、山古志でトップのシェアを占めるに至っていた。養鯉池は棚田から転換したものが多く、甚大な被害を被り、多くの鯉は死に、地域にとって経済的なダメージは大きい。



被災状況 (H17.6.21)



復旧状況 (H17.11.27)



※被災状況の写真：北陸地方整備局提供